2007－12

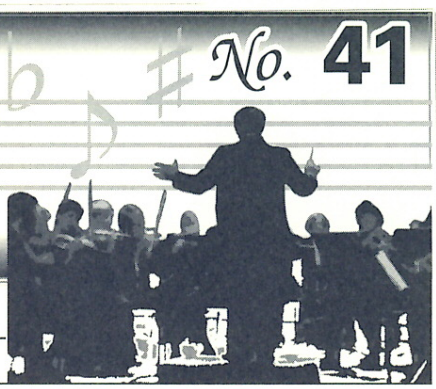
Sakkyo Club

札響くらぶ

No. 41

発行／札響くらぶ（財）札幌交響楽団内

札幌市中央区中島公園1番地15号（札幌コンサートホール内）



日本プロオーケストラファンクラブ協議会（JOFC）第一回総会が仙台で開催されました

～行って来ました！　仙台へ～

昨年11月11日、札幌で日本プロオーケストラファンクラブ協議会(JOFC)設立総会をへて、本年９月第一回の総会が仙台フィルハーモニークラブ(SPC)の皆さんによって開催され、札響くらぶからは、上田会長以下13名が参加しました。仙台訪問のあらましを会員の皆さんへお伝えします。

９月29日新千歳空港を飛び立って仙台へ、あっという間の旅でした。SPCの工藤会長をはじめ懐かしい面々が迎えてくれました。そこには、山響ファンクラブ、広響フレンズ、群響県民の会の皆さんもおられ、「しばらくぶりです！」おもわず握手の嵐でした。

その第一歩は、仙台青年文化センターで開催された、仙台フィル第222回定期演奏会鑑賞から始まりました。指揮はすごいとの噂の高い仙台フィル常任指揮者になったフランス人のパスカル・ヴエロさんです。最初の曲目は、「尾高賞」受賞作品で北爪道夫さん作曲「管弦楽のための映照」です。独特の響きの連続で、静かな中にも情熱の嵐が吹いているそんな曲で、曲終了前に「ブラボー！」がはいるなど800席がアットホームな心地でした。作曲者である北爪さんも登場です。札響でも取り上げて欲しい曲でした。

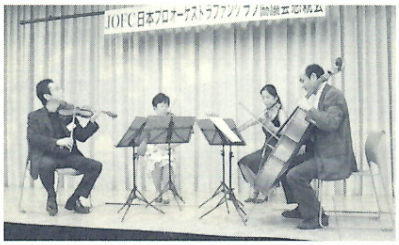
何と言っても圧巻は、ベルリオーズの幻想交響曲作品14です。パスカル・ヴエロさんの自由でしなやかに踊りまくる王子のごとき指揮ぶりは、あるときはワルツを踊り、あるときは一点を指差し微動だにせず、情熱をひたかくし、最後のクライマックスへ導くその姿は、聴くものにとっても仙台フィル楽団員にとっても夢のひと時でした。

会場を仙台駅そばの「ハーネル仙台」に移し、「日本プロオーケストラファンクラブ協議会(JOFC)第一回総会」への出席です。札響くらぶの発表は、武藤事務局長から、「札響くらぶ楽譜支援施策」です。会費の中からの500円と、それに加えて自由に設定した金額を寄付できる仕組みで札響さんが楽譜購入に役立てていることを報告し、定期会員にはなれないけれど何か札響のためにといったファンも結集している施策に、参加者はもとより広島から参加した中国新聞社記者、地元河北新報の記者たちも注目したようです。各ファンクラブからも貴重な施策が発表されました。今回は特別に昨年７月に開催され、札響くらぶも参加した「全国音楽ボランティア札幌フォーラム」の模様を実行委員会を代表して竹津副実行委員長・赤石事務局長・三坂事業部長からの報告もあり、「音楽ボランティア同士手をつなぎましょう」と仙台での開催に期待を寄せました。そして、来年は山形開催で決定し採択されました。今回は資料参加ではありましたが、はじめて名古屋フィルファンクラブが参加しました。

上田 JOFC 会長があいさつ

武藤事務局長による報告

中央が指揮者のパスカル・ヴエロさん


仙台フィルメンバーによる弦楽四重奏

松島・瑞厳寺にて

いよいよ交流会の始まりです！何と豪華な顔ぶれで、梅原仙台市長さん、仙台市議会あげて仙台フィルを応援していると言う渡辺公一議員さん、パスカル・ヴエロさん、伝田コンマスや沢山の楽団員も参加されました。そこにわれら札響くらぶ上田会長が挨拶し、「札響は市民の宝、キタラのようにいい会場で小学６年生全員聴いてもらっている。仙台も実施したらいい！」と…すると梅原仙台市長もおもわず「仙台もホールを…」とオフレコですとことわりながらでしたが、参加者からも拍手でした。パスカル・ヴエロさんに聴いた話では、1959年フランスリヨン生まれ、ボストン交響楽団副指揮者で小澤征爾さんのアシスタントとして４年おられたそうで、小澤さんのカリスマ性を学んだそうです。楽団員さんから演奏のプレゼントもあり、あっという間の交流会です。居酒屋で続きがあり、さらなる懇親を深めました。毎回ですが本当に楽しいひと時です。

翌日30日は、仙台フィルハーモニークラブメンバーでもあり、札響くらぶのメンバーでもあり、更には、山響ファンクラブとトリプルメンバー栄浪さんの引率で「松島のたび」の始まりです。周遊切符を買い、JR 仙石線で一路瑞厳寺、五大堂、円通院の庭園、そして松島しまめぐりの遊覧船で塩釜へ、楽しい思い出をつくり、仙台空港へ向かい、新千歳へ無事到着しました。

今回の企画でご苦労された仙台フィルハーモニークラブメンバーの皆さんありがとう！来年は山形でお会いしましょう！そして、山響ファンクラブの皆さん来年よろしくね！

（札響くらぶ副会長
西川　吉武）

札響くらぶメンバーが挨拶

JOFC 出席者・全員集合

尾高音楽監督の還暦をお祝いしました

11月８日に還暦を迎えられる尾高音楽監督ご夫妻をお迎えして、札響くらぶスタッフが前日７日にお祝いの食事会を行いました。お祝いには、伊藤亮太郎、三上亮両コンサートマスター、事務局より宮下良介事業部部長、季刊ゴーシュの閔（ミン）さんも参加され、12月にオープン予定のダイニング『イル・ネージュ』で佐藤シェフの特別メニューに舌鼓を打ちました。還暦のお祝いとして、ゴーシュと札響くらぶからプレゼントがありました。終始笑顔の絶えないアットホームな雰囲気で、あっという間の３時間でした。

交流会が開催されました

9月22日　第501回札響定期演奏会B日程終了後にキタラ2階会議室において、札幌交響楽団団員のみなさんと札響くらぶの会員との交流会が開催されました。大平まゆみ、伊藤亮太郎両コンサートマスターをはじめとして多数の札響団員の方々や西村専務理事、宮沢事務局長が参加されました。今回も気取らず誰でも参加できる手作りの交流会ということで、缶ビールを片手につまみを食べながらの交歓会となり、大いに盛り上がったひと時をすごす事ができました。

恒例の色紙へのサインも団員の方々は気軽に応じてくださり、参加した札響くらぶ会員は何人もの方々にサインをお願いしていました。また、団員の皆さんの一言スピーチではそれぞれ軽妙なお話を聞かせて下さり、日頃見られない一面を見せていただきました。特に、2級船舶操縦士の免許を取られたチェロの荒木均さんからは「これからは僕のことを船長と呼んでください」とのお話があり、みんなを笑わせていました。また、団員さんが一様におっしゃっていたことは「ぜひ、演奏会の感想を直接聴衆の方から聞きたい。なまの声を聞かせてほしい。」ということでした。皆さんも演奏会の感想など日ごろ思っていることを直接ぶつけてみてはいかがでしょうか。

今回は、団員さんが思いのほか多数参加してくれたのにもかかわらず、札響くらぶ会員の参加があまり多くなかったのが少し残念でした。団員さんも皆さんとのお話を楽しみにしています。今後も、肩肘張らずに気楽に参加できる交流会を目指します。団員さんとくらぶ会員との絶好の意見交換の場ですので、多数の皆さんが気軽に参加して下さる事を望みます。

（松尾英樹）

札響物語 40

500回定期を迎える札幌の街（その２）

第100回定期演奏会は「札幌冬季オリンピック大会」の直前、この年、真駒内のアイスアリーナが竣工、NHK札幌放送局の委嘱でテーマ音楽「虹と雪のバラード」が作られた。この歌はトワ・エ・モアのデュエットで大ヒットした。作詞は整形外科医故河邨文一郎（初代ハイメス理事長）、作曲は札幌出身の村井邦彦。2003年秋札幌で整形外科学会が開かれ、その会場へ特製車椅子で故河邨氏が現れた途端に舞台上でトワ・エ・モアが「虹と雪のバラード」を歌い始める心憎い演出だった。感動する故河邨氏の前にトワ・エ・モアが舞台から降りてきて「虹と雪のバラード」の詩碑は何処にあるのですかと質問した。本人は勿論周りの誰も答えられなかった。まだ無かったのである。すぐに詩碑建立実行委員会が立ち上がり2005年９月11日に大倉山シャンツェの前に建立された。札幌冬季オリンピックから33年経っていた。

第100回を指揮したペーター・シュバルツは1975年には米国とドイツへの札響初の海外公演を行ない、それを最後に正指揮者は故岩城宏之に替わった。

1981年に第200回定期を指揮したのは故岩城宏之音楽監督、会場は北海道厚生年金会館だった。メイン・プログラムはマーラーの交響曲第１番「巨人」。第100回と第200回の間に札幌市は区制がしかれ中央区など７つの区が誕生した。また、地下鉄東西線が全線開通し札幌市教育文化会館（教文）が落成した。教文の音響設計は後に札幌コンサートホールkitaraの音響設計を担当する（株）永田音響設計、開館前の音響テストは故岩城宏之指揮札響が行った。

第300回定期は1989年３月に初代常任指揮者故荒谷正雄を指揮者に迎え、当時の指揮者陣、秋山和慶、堤俊作、小松一彦で行い、第１回創立披露定期演奏会で演奏されたクリスチャン・バッハのシンフォニアニ長調他を札幌市民会館で演奏した。第200回と300回の間1985年には世界的に話題になった黒澤明監督の映画「乱」の音楽の演奏（音楽：武満徹）を札響が担当した。この映画の演奏オーケストラは黒澤の希望するロンドン交響楽団と武満が主張する札響とが天秤に掛けられ、武満が勝って千歳市民文化センターでの収録となった。収録は面白く無さそうな顔で登場した黒澤監督の立会いの下に始まった。

黒澤が最も大事な場面と力を入れ、この曲の音入れだけで３日間を消費してしまうだろうと言っていたクライマックス部分の収録が初日の午前中で終わった。

黒澤は映画「デルスウザーラ」のロケ先のシベリアで痛めた足を引きずりながら指揮台に小走りに駆け上がり楽団員に向かって「千歳まで来た甲斐がありました」と深々と頭を下げた。

1987年には「札幌芸術の森」（芸森）が誕生し、札響の練習場は1972年以来長年親しんだ真駒内青少年会館から芸森の大練習室に移った。　［続く］

（竹津宜男）

新しいコンサートマスターの登場です

11月の定期演奏会から札響に新しいコンサートマスターが仲間入りしました。三上　亮（みかみ　りょう）さんです。これで札響はコンサートマスターが３人体制になります。三上さんの簡単なプロフィールをご紹介します。

1976年10月30日水戸生まれ。東京藝術大学在学中に安宅賞、第67回日本音楽コンクール第２位、河合賞、いしかわミュージックアカデミー音楽賞等受賞。1999年、東京芸大首席卒業。2001年秋より2003年まで米国南メソディスト大学メドウズ音楽院、2004年秋よりスイス、ローザンヌ高等音楽院、2006年秋からはメニューヒン国際音楽アカデミーに留学。2004年、ブリテン国際ヴァイオリンコンクール特別賞。2005年、フォーヴァルスカラシップ・ストラディヴァリウス・コンクール第２位。これまで景山誠治氏、エドワード・シュミーダー氏、ピエール・アモイヤル氏、アルベルト・リシー氏に師事。北海道とのかかわりは2001年のPMFにN響のエキストラとして出演。その後、札響にゲスト・コンサートマスターとして招聘され、2004年10月の名曲シリーズ、ほくでんファミリーコンサート、2007年７月の帯広公演、PMFピクニックコンサートに出演。

1・2・3月　札響定期の聴き所　～定期演奏会を満席に～

これからの札響定期の聴き所を札響くらぶ会員に語っていただきました。皆さんもお友達を誘って、定期演奏会に出かけましょう。私たちの手で定期演奏会を満席にしましょう。

■第505回定期演奏会　1月25日(金) 19：00～　26日(土) 15：00～

指　　揮：高関　　健（札響正指揮者）
独　　奏：ピーター・ウィスペルウェイ（チェロ）
曲　　目：ケージ／四季（1947）、ルトスワフスキ／チェロ協奏曲（1970）、
　　R・シュトラウス／交響詩「ツァラトゥストラはかく語りき」

「ツァラトゥストラはかく語りき」と聞くと、どうしても印象的なのが映画「2001年宇宙の旅」。冒頭のデンドンデンドンデンドン…とそれに続く「美しく青きドナウ」がセットで頭の中に流れて来るものでした。そして初めてこの曲を最後まで聴いた時の率直な印象は「ああ、アレで終わりじゃないんだ、この曲は」というもので、ヴァイオリンのソロが魅力的だったのが印象的でした。オーケストラをフルに使い（演奏するのに100人必要って本当ですか）、そこかしこに、いかにも「これを作曲したのはR・シュトラウスだ」と言わんばかりの聞き覚えのある節回し(？)が出てきたり。しかし、「神は死んだー！」という、あれだけ派手な冒頭部分に比べてラストは…。思わず「これで終わり？」とつっこみを入れたくなるような、静かで線の細い終わり方。ところで皆さん、ケージとルトスワフスキの曲は聴いたことがありますか。聴いたことのない私はケージのCDを買いました。まだ、聴いていません。演奏会までには聞き込んでいこうと思っています。でも、緊張感あって、疲れるんだろうなあ…。

■第506回定期演奏会　2月22日(金) 19：00～　23日(土) 15：00～

指　　揮：尾高　忠明（札響音楽監督）
独　　奏：デヤン・ラツィック（ピアノ）
曲　　目：モーツァルト／ピアノ協奏曲第23番、ブルックナー／交響曲第9番（ノーヴァク版）

交響曲第9番はブルックナーの最後の交響曲ですが、最終楽章は未完のまま残されました。1884年、交響曲第8番が完成した後、この第9番の作曲に取り掛かるのですが、旧作品の改訂などに忙しかったために第9番に集中出来ませんでした。1892年の第8番の初演後にやっと第9番に打ち込めるようになりますが、この時には既に病魔に冒されていました。1894年にようやく第3楽章まで書き上げましたが病状はさらに悪化します。そのような中で最終楽章を完成させようと2年もの間必死になりましたが、ついに最後まで作曲する事が出来ませんでした。（実に、亡くなった日の午前中まで作曲に携わっていたそうです）ブルックナーは完成することが出来ませんでしたが、後にいくつかの版が出版されました。未完の第4楽章を補筆したものもありますが、今回の演奏会のノヴァーク版は第3楽章までとなっています。ブルックナーがこんなに頑張って作った曲です。ブルックナー好きは勿論、重くて、暗くてブルックナーはどうも、という人も改めて聴きなおし再発見してください。

■第507回定期演奏会　3月21日(金) 19：00～　22日(土) 15：00～

指　　揮：小林研一郎
曲　　目：スメタナ／連作交響詩「わが祖国」全曲

「わが祖国」好きにとっては、「全曲」というだけで涙ちょちょぎれる思いでございます。全6曲のうち「モルダウ（ヴルタヴァ）」は単独で演奏される事も多く、「ヴィシェフラト（高い城）」「ボヘミアの牧場と森から」もたまに演奏される機会はありますが、残りの3曲はまず「全曲」の時以外に演奏される事は無いでしょう。あと3曲のタイトルは？と訊かれて即答出来る方も少ないでしょう。（ちなみに「シャルカ」「ターボル」「ブラニーク」です）そういう自分も「ヴィシェフラト」の冒頭の2台のハープの音を聴いただけで「うおおお～～始まった～～!!」と血圧が急上昇…って程ではありませんが、好きでよく聴いております。以前はドヴォルジャークの「新世界より」のLPレコードを買うと、よくB面の最後に「モルダウ」がセットで(？)入っていたものです。もしかしたら「モルダウ」の人気が高いのはこれのせいじゃないかとも思いましたが…。なんでも曲に歌詞を付けて合唱曲にもなっているそうです（…そういえば、さだまさしさんも歌ってました）。「シャルカ」は伝説上の女戦士の物語で、この話を知ってからこの曲を聴くと思わずニヤリとしてしまいますし（シンバルの名人芸にも注目）、「ボヘミア…」も聴いているだけで目の前にのどかな風景が浮かんでくるよう。「ターボル」「ブラニーク」を聴くと、確か世界史でフス教徒の反乱とかいうのを習ったような…もうちょっとちゃんと勉強しておけばよかったかも、と反省。

久々に札響を指揮する「炎のコバケン」こと小林研一郎さん、今回、札響とどういう演奏を聴かせていただけるのか、今からちょっとドキドキです。

退団する方々——

Player's talk 1

ヴァイオリン
鈴木 純子（すずき じゅんこ）

札幌交響楽団を９月に定年退団なさった鈴木純子さん、そして10月に定年退団なさった鹿島祥湖さんに札響の思い出を話していただきました。なお、お二人には定期演奏会時に札響くらぶよりお花を贈らせていただきました。

——ヴァイオリンとの出会い

幼稚園のころから音楽を聴くのは好きでした。お向かいが音大出のヴァイオリンの先生のお宅でしたので、いつもヴァイオリンの音が聴こえていました。小さな子供がヴァイオリンのケースを持って通っているのを見て、どうしてもやってみたくなり、自分から母に習わせてほしいと頼みました。小学１年生になりヴァイオリンを習わせてもらいましたが、音階を教わったら、すぐに簡単な曲が次々と弾けるようになりましたので、ヴァイオリンを弾くことが楽しくなりました。それで始めて２・３週間でしたが、発表会に出て１人で弾いたんですよ。アレグロか何か小さな曲でしたけど。人前で弾くのは平気だったようです。

——桐朋学園では（そして札響入団）

私が入学したときの桐朋学園の合格者はヴァイオリンが６名でした。その中で地方出身者は私一人だけでした。大学２年の終わりから江藤俊哉先生のレッスンを受けることになりました。卒業の時には江藤先生から、演奏家を目指して米国留学のお話もありましたが、東京で演奏活動をしながらレッスンを受けて、約１年後に札幌に帰りました。札響は学生時代にエキストラで弾いた事がありましたのでオーディションを受けて入団しました。友達からは故郷に帰ってもプロのオーケストラがあっていいねと言われました。私が入った頃は演奏会のための練習譜は個人で用意しなければならず、両面コピー機のない時代でしたから、大変でした。曲はモーツァルトやハイドンのシンフォニーを演奏することが多かったです。

——思い出に残る指揮者は

常任指揮者だったペーター・シュバルツさんの事が懐かしく印象に残っています。温和なお人柄でシャボン玉のようなきれいな音で、という意味だそうですが身振り手振りでシャボネ、シャボネとおっしゃって指揮されていました。特にモーツァルトやウィンナワルツでは素晴らしい音楽に感動させられながら演奏していました。

——札響では海外公演もありましたが

私が札響に入団して初めての海外公演は札幌の姉妹都市のポートランドとミュンヘンでした。指揮はペーター・シュバルツさんでした。その後2001年にはイギリス、2005年には韓国へ行きました。いずれも尾高さんの指揮でした。それぞれの国で伝統的な文化に触れ、また素晴らしいソリストとの協演はいつまでも心に残る良い思い出となりました。イギリス公演でのエピソードです。ベルファストで1900年に建てられた街のシンボルでもあるシティホールを、時間がありましたので１人でカメラを持って見学に行きました。丁度そこへツアー客の一行がやってきて、これは好都合と思いその中に紛れ込んだのです。解説付きで建物の中を見て歩くことができ、写真もたくさん撮ることが出来てラッキーでした。ヨーロッパの中でも傑作とよばれる古典ルネサンス様式の素晴らしい建物で、そこで市長さん主催のパーティがありました。

——趣味は

写真を撮るのが好きです。友人関係の演奏会のステージ写真や、江藤先生が札幌でファミリーコンサートをなさったとき、また、ウィーンフィルのメンバーの室内楽の演奏会なども撮らせていただきました。特にイギリス公演では歴史的建造物が多く、たくさん撮りました。

——最後の定期演奏会にはお母様もお見えになっていました

母は85歳になります。キタラでの札響の演奏会を聴くのは初めてでした。ロビーコンサートも聴いてもらえてうれしかったです。少し、親孝行ができました。小さい時の発表会の服や、リサイタルなどのドレスはいつも母の手作りだったのを思い出しました。

——今後の活動計画は

具体的には決まっていませんが、ソロや室内楽などお声がかかればボランティアでも演奏していきたいと思っております。

——札響くらぶに一言

いつも札響を支援してくださり、本当にありがとうございます。感謝しています。今後とも札響の応援をよろしくお願いします。

photo：野口　隆史
（提供「季刊ゴーシュ」）

退団する方々——

Player's talk 2

ヴィオラ
鹿島（かしま）　祥湖（よしこ）

——楽器との出会い

３歳の時、保育園のお兄さん、お姉さんがヴァイオリン教室へ通っているのを見て、私も習いたいと母にお願いしたことが最初です。公園や遊園地で遊ぶのと同じ感覚ではなかったのでしょうか。

——学生時代の思いで（そして札幌へ）

『女の子は大学へ行かなくても幸せになれる』という父の方針に逆らって、母の応援もあり、将来は『発達障害』を持った子供たちの教育にたずさわりたいと考え、音楽大学ではなく、社会福祉を専攻する進路を選びました。その大学では先輩たちがオーケストラを組織し始めており、熱心に勧誘されました。第１回目の演奏会では部員よりも音大からのエキストラの方が多く、公演３日前の突然の指揮者交代などのハプニングにもめげず、以来長い歴史を刻み続けていますし、OB オーケストラも組織されました。当時お世話になった現在プロの方々や仲間たちとは今でも交流があり、大切にしております。トレーナーとして参加していた主人ともここで知り合い、彼の札響入団とともに来札しました。

——ヴァイオリンからヴィオラへ（そして札響入団）

当時、バンベルク響のすばらしいチェリストから札響の常任指揮者になられたP・シュバルツさんから『あなたはヴィオラの方がむいています』の一言で彼のレッスンを受けオーディションの結果、入団することができました。その後、在京のオーケストラや３年程通ったボストン響のM・ザレッキー先生など、多くの方々からたくさんのことを学んだのも貴重な体験でした。

——思い出に残る演奏家は

入団当時は世界有数の指揮者・ソリストとの共演も多く、強烈な刺激を受けました。

指揮者では、岩城宏之、朝比奈隆、山本直純、小沢征爾、山田一雄、ヤン・クレンツ、J・B・マリ、Z・コシュラー、T・グシュルバウアー、フベールスダン、そして末席まで歩まれて指揮されたV・ノイマンさんら。

ソリストではL・ゲルバー、V・アシュケナージ、エッシェンバッハ、A・シフ、A・ワッツ、M・アルゲリッチ、園田高弘、G・オピッツ、フーツォン、M・アンドレ、I・スターン、I・パールマン、ニコレ、H・バウマン、G・ヘッツェル、R・シュトレンク、ウートウーギ、V・ムローバ、数住岸子、今井信子さんら。

ファゴットの戸澤宗雄さん、ヴィオラの奥邦夫さんとご一緒出来たことも印象的でした。

——札響では海外公演もありましたが

東南アジアでは当時、治安の悪い地区もあり、楽員はホテルに缶詰状態、移動は交通規制の中を白バイで先導、空港はVIP ゲート使用。イギリス公演では９・11の直後の緊張感の最中、実施が危惧されることもありましたが、いずれも大成功でしたね。

——最後の定期演奏会はサー・ネヴィル・マリナーさんの指揮でした

彼のタクトですばらしい音楽に浸れたこと、将来有望な若手ソリスト（彼女は日独のハーフで日本語も堪能、日本名の姓が「鹿島」という偶然）と共演出来たこと、そしてなによりもマリナーさん自ら退団の花束を手渡してくださり抱擁されたことは、言葉に表せない程の感動でした。『終わりよければ全てよし』でしょうか。

——今後の札響に望むことは

オーケストラは歴史を重ねながら成長していくものと思うのです。北海道・日本のみならず、世界的な存在となってほしいのです。海外公演を可能な限り経験することも大切だと思います。楽員と事務局が両輪となって切磋琢磨し、多くのファンから愛され続けてほしいです。

——今後のご予定は

今は充電期間を作り、音楽も含め『私に何が出来るか、何をすべきか』をじっくり考えたいです。１人で出来ることは限界もあるでしょうから、いずれ思いを同じくする仲間と、子供たちや病んでいる方たちのために働きたいと思います。ケア・マネをしている娘から手話を教えてもらって演奏の場でお話をしたり、作曲家の歩いた道を辿ってみるのもいいかなと。東京の友人たちは『いつ帰ってくるの？いっしょにアンサンブルしようよ』とも言ってくれています。

——札響くらぶのみなさんへ

とても頭が下がります。さりげなく暖かく支えてくださっています、そんなスタンスを日本中に示してください。なくてはならない存在なのですから。

ありがとうございました。

photo：澁谷　賢利
（提供「季刊ゴーシュ」）

from 札響くらぶ

「札響くらぶホームページ」は続々、情報を更新中です

札響くらぶはホームページの充実に力を入れています。札響の演奏会及び団員の皆さんが個人で開くリサイタルなどもいち早く情報提供できるように全てを網羅すべく更新しています。演奏の聴き所や、出演者やイベントのHPへのリンクも埋め込んでいます。過去の公演も保存しており、会報や交流会の模様など札響くらぶの各種情報も満載です。是非、ご活用下さい。アドレスはhttp://www2.ocn.ne.jp/~muto/sakkyoclub2/index.htmlですが、「札響くらぶ」で検索すると簡単にHPにいけます。「おしゃべりROOM」は意見交換の場ですので、気軽に参加してください。

意見・感想を募集します

札響くらぶ会員の皆さんからの投稿を募集します。この会報誌面を皆さんの記事でいっぱいにしましょう。札響演奏会の感想や、皆さんが日頃思っていること、その他お気づきの点などをどしどしお寄せください。内容は問いません。特に期限はありませんが、1月31日までに投稿してくださった人の中から、抽選でプレゼントを差し上げます。なお、当選は商品の発送をもってかえさせていただきます。

プレゼント商品

① 3月の札響定期演奏会のS席チケット（4名様）（座席の指定はできません）
② 鈴木純子さんのサイン入り色紙（2名様）
③ 鹿島祥湖さんのサイン入り色紙（2名様）

投稿は、ハガキまたは封書で
〒064-0931 札幌市中央区中島公園1番15号 札幌交響楽団内
札響くらぶ会報係　に
または　E-メールで sakkyoclubmail@yahoo.co.jp　までお送り下さい。なお、その際必須事項を必ずお書き下さい。

必須事項

住所・氏名・会員番号・希望のプレゼント商品の番号。なお、匿名希望の方は、「匿名希望」または「ペンネーム」をお書き下さい。

札響くらぶ会員特典

会員の特典は以下のとおりです。有効にご利用下さい。
また、特典を提供してくれるお店をご存知の方はご一報ください。

- **札幌交響楽団定期演奏会、名曲シリーズのチケットの10%割引**

ただし、キタラチケットセンターのみの取り扱いとなります。他のチケットセンターでは適用されません。

- **テラスレストラン・キタラ**

飲食10%割引。ただし、一部の商品を除きます。また、グラスワインのサービスがある場合もありますので、あわせて係員にお尋ねください。

- **キクヤ楽器店（狸小路3丁目）**

楽器以外の商品10%割引。ただし、店内に限ります。キタラ等の出店では適用されません。

- **スナック「りつこ」（南6西3第2桂和ビル2F）**

「札響くらぶ溜り場」として特別価格2,500円（税込）でウィスキー、焼酎2時間以内飲み放題（おつまみ、カラオケ付き）

- **ダイニング『イル・ネージュ』（北区北12条西1丁目　北12条パークマンション1F）**

12月1日オープンの新しいお店です。気取らず家庭的な雰囲気で新進気鋭の佐藤貴理シェフがおもてなしをします。忘年会・新年会にご利用ください。ご予約・お問合せはTEL(011)717-2555まで。

編集後記

今回の41号より編集を担当することになりました松尾です。なにぶん不慣れで、初めてのことばかりでしたが、何とか完成にこぎ着けました。佐藤前編集長のようなまとまった紙面づくりはまだまだ先のことになりそうですが、お気づきの点がありましたらどしどし指摘をお願いいたします。

また、札響くらぶ会員の皆様の声を、この会報に反映させていきたいと思っています。ささやかですがプレゼントも用意しました。ふるって投稿をお願いします。

（松尾英樹）